

「平成26年度博士課程教育リーディングプログラム委員会（第1回）」議事概要

1. 日 時：平成26年2月25日（火）10：00～12：00
2. 場 所：東京グリーンパレス 地下1階会議室 「ふじ」
3. 出席者：（委員）有信委員、安西委員、猪口委員、金子委員、鎌田委員、桐野委員、窪田委員、熊谷委員、新海委員、長谷川委員、八田委員、林委員、米澤委員、室伏委員、鷺谷委員
（文部科学省）里見大学振興課長、猪股大学改革推進室長
（事務局）渡邊理事、京藤監事、梶山人材育成事業部長、奥田課長、有菌大学連携課長代理

4. 議事概要

（1）採択プログラムに係る中間評価について

- ・「博士課程教育リーディングプログラム」における中間評価の実施について[資料1]、「博士課程教育リーディングプログラム」評価要項（案）[資料2]、評価要項のポイント[資料3]、「博士課程教育リーディングプログラム」に関する学生調査（案）[資料4]、「博士課程教育リーディングプログラム」に関する調査〈プログラム担当者用〉（案）[資料5]、「博士課程教育リーディングプログラム」平成23年度採択プログラム中間評価調書様式（案）[資料6]、「博士課程教育リーディングプログラム」平成23年度採択プログラム中間評価調書作成・記入要領（案）[資料7]、「博士課程教育リーディングプログラム」中間評価書面評価書（案）[資料8]、「博士課程教育リーディングプログラム」中間評価結果（様式）（案）[資料9]、「博士課程教育リーディングプログラム」中間評価現地調査実施要領・報告書（案）[資料10]、「博士課程教育リーディングプログラム」中間評価ヒアリング実施要領・審査表（案）[資料11]、「博士課程教育リーディングプログラム」平成23年度採択プログラム中間評価日程（案）[資料12]について、それぞれ文部科学省及び事務局より説明があり、質疑応答の後、各資料等について後日委員より意見を受け付け、委員長一任とすることで了承された。主な意見は以下のとおり。

- 真に本プログラムがうまくいっているかどうかは、学生からの調査結果により判断できる。また、アンケートは電子媒体で作成、提出できるようにした方が良い。
- アンケート調査では人生観、職業観、世界観、社会観のようなものを聞くことで、分析に役立てることができる。デモグラフィックスを充実させるとともに、学生に対しプログラムに参画して人生観や世界観、国際意識がどう変わったか、将来に向けて何が必要と考えているか、プログラムがどういう影響を与えているかなど記入させてはどうか。
- アンケート調査により詳細に現状を把握しようとするならば、文章を書かせるのがよい。ただ、結果を大学側に読まれると思うと、学生側も書きにくいのではないか。ストレートな意見を記入してもらうために、開示しないことも考えられる。
- 大半のプログラムは学位授与を学生が所属する専攻が行うことになっており、学生に対する教員側からの見えざる圧力（学位授与権および就職等に対する影響力）はなくなってきている。そのため、プログラムの改善という意味では、学生のアンケート結果をフィードバックをした方が良い。

- 自由記入欄のアンケート結果は、個人を特定できない範囲で開示した方が大学にとって今後の参考になる。また、フィードバックは回答のインセンティブにもなる。
- 輩出すべき人材像に向け、全学のカリキュラムの編成を含め大きく切り替える準備をしているかなど、大学としての事業を定着発展させるための取組を確認したい。
- プログラムに直接関係していない教員の意見を何らかの形で聴取するメカニズムがあると良い。中間的な対象として、部局長などが考えられる。
- 従来の事業において大学側は、卒業後の学生が本来の目的に沿った形で活躍しているかというフォローが抜けている。それをフォローするための何らかの仕組み、あるいは仕掛けを作っているかを要項、調書もしくはアンケートに加えることが望ましい。
- リーディングプログラムに対する学生の意識と、プログラム担当者の熱意とのギャップがフォローアップで感じられた。プログラム担当者の熱意が学生の末端まで徹底されていない印象があり、アンケートでも質の良い回答を得るためにはそれなりのメッセージを送る必要もある。

(2) 採択プログラムに係るフォローアップについて

- ・採択プログラムに係るフォローアップについて、博士課程教育リーディングプログラム採択プログラムに係るフォローアップについて（改正案）[資料13]と博士課程教育リーディングプログラム平成24、25年度採択プログラムフォローアップ日程（案）[資料14]について、事務局より説明があり、質疑応答の後、各資料等について後日委員より意見を受け付け、委員長一任とすることで了承された。主な意見は以下のとおり。

- 事業が全学的に定着するかというのが重要であるので、フォローアップの際に項目を設け、確認にしていくという取組があるとよい。
- 意見交換の場を増やすなど、プログラムオフィサーと委員会及び部会委員との連携の強化が必要である。

(3) その他

次回の委員会は、部会における中間評価終了後に開催することとした。